



東日本大震災 その時 私たちはどう対応したか

仙台厚生病院 看護部長 高橋 秀子

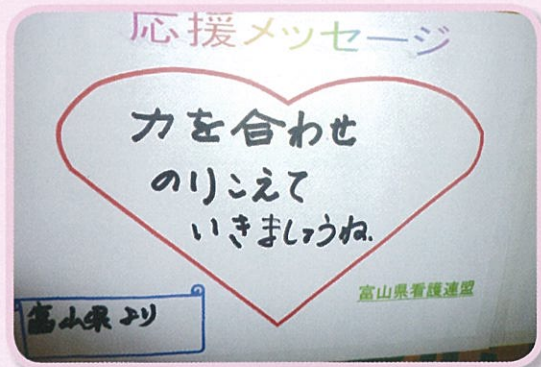
平成23年3月11日(金)
14時46分 その時私は
病院建物と別の管理棟
5Fで実習を受け入れる大学の先生方と実習
の打合せをしていました。突然の激しい揺れ
に驚いてテーブルの下に頭だけを隠し、病棟、
外来にいる在院患者さんや職員が大変なこと
になっているのではと恐怖の塊になっていま
した。

病院は 5分後に災害対策本部を立上げ、
災害対策本部長である理事長は常に「職員を
守り、患者を守る」を基本姿勢としていまし
たから、職員の安否確認、出火の有無確認を
最優先にした指示が出ました。その後情報を
得る手段としてテレビ1台を非常電源で使用
し、患者さんや面会者がパニックに陥らない
よう努め、連絡手段として災害時に強い公衆
電話を使用してもらいました。職員が守られ
ていると感じた要素は、帰宅できない職員に
対して食事や宿泊場所の提供、健康面や清潔
面の支援が行われこんなに恵まれた環境でい
いのかしらと思いながらも有難さを実感しま
した。被害が最小限の病院は診療に関しても
救急応需で一時も質を落とすことなく通常診
療することができました。子供を保育園に預
けて働く職員はライフラインが回復し開園す
るまでの期間、自ら考えて院内臨時保育園を
設けて運営してくれましたので病院としては



大変助かりました。うれしさと同時に看護師
のたくましさを感じました。

被災地からの患者受け入れは 宮城県医師
会救急災害時情報ネットワークを利用しまし
た。県内の医師会や病院、クリニックが加入
し災害時医療に役立てようと平成22年4月
に発足した事業でした。携帯型MCA無線機
を利用した患者受け入れ要請システムは大変
有効でした。被災した病院からの患者受け入
れ要請は「呼吸器科患者〇人大丈夫ですか？」
「〇〇避難所でインフルエンザ発生したが何
人入院できますか？」「緊急手術が必要です。
自衛隊の災害ヘリで搬送します」などでした。
職員全員が入院病床の有無に関わらず寒さの
厳しいなか必死な気持ちで受け入れたと思
います。被災病院からの患者搬送は、入院可
能な各病院へ大型バスで搬送されました。救
急外来はトリアージする外来看護師のサポート
に病棟看護師が一緒になって「この患者さん
は私の病棟に入院していただきます」など見
ていても気持ち良い動き方でした。



大震災から4か月が過ぎ、院内はいつもと
変わらない状況に戻りましたが、津波で犠牲
となった看護師への想いは私たち職員の心か
らいつまでも消えることはないでしょう。



みやぎ北部循環器科において

みやぎ北部循環器科 看護部長 齋藤 澄子

当院は循環器専門の有床診療所で心臓カテーテル検査、治療を主に行っております。地震発生時は定期検査・治療の時間帯でしたが、幸いなことに患者さん入れ替えのためカテーテル中の方はおらず、在院患者数は15名で皆さん御無事でした。

地震直後から停電となり自家発電に切り替えとなりました。また断水にもなりました。当院の自家発電の規模はあまり大きくなく、使用できるのはリカバリー室や心カテ室の無停電コンセントとナースコールのみです。大規模停電のためガソリンスタンドも稼働せず、自家発電用の軽油がきれいなよう手配するのが大変でした。たまたま重機会社を経営されている患者さんから軽油の入ったトラックをご好意でお借りでき、何とか自家発電を継続させ、3日後に無事電気・水道が復旧しました。

患者さんの食事は当院で備蓄していたレスキューフーズという発熱剤つきの非常食で対応し、その後プロパンガスが使用できたので炊飯しました。

給食は業者に委託していますが、当面は物資搬送の目途が立たないとのことでストックしていた食材で最低限のものは何とか調理してもらいました。その後の食材は、関連病院や農家の患者さんから譲っていただいたり、食品問屋や青果市場に直接交渉して確保し、3月末から徐々に業者の納品も可能となりました。

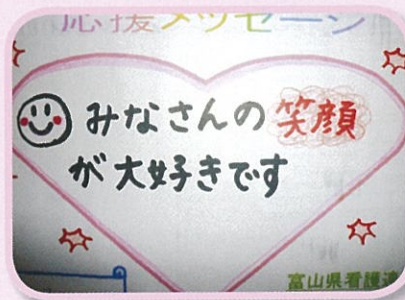


また院内のライフラインは3日で復旧したもののガソリン不足が深刻になってきました。スタッフほぼ全員が自家用車にて通勤していたので、市内の職員を中心に勤務変更し自転車通勤してもらいました。給食もあり合せのものしか準備できなかったため、予約入院の患者さんは延期していただき急患のみを受け入れ、休日に準ずる勤務体制としました。

しかしいつまでも休日体制とするわけにはいかず、スタッフ全員気持ちを切り替え、3月28日から通常業務に戻すことを目安としました。そして入院予約を延期していた患者さん約50名に電話連絡し、震災にて休んでいた2週間を徐々にばん回していきました。

市の災害対策本部にはガソリン券発行のお願いに何度か行きましたが確保困難で、結局は自分たちで何とかしなくてははいけないことを実感しました。

余震の不安もある中、今回の経験をもとに災害対策を見直し、現実に対応したマニュアルを作り今後の災害に備えています。





東日本大震災を経験して

仙台社会保険病院 看護局長 中村 恵美子

当院は、17診療科428床の中規模病院です。腎センターがあり、外科や整形の患者さんも腎疾患患者が多く腎に特化した病院です。2月の病床利用率は71.8%、平均患者数は300人でした。在院日数は14.7日です。全職員数は676人で看護師はそのうち半数を占めています。透析室は63床あり普段は日中透析を10時から、夜間透析は17時からと一日2クール行っています。透析室は自家発電が使える、酸素、吸引器も使用可能です。3月11日、14時46分M9の大きな地震がありました。7分間の揺れです。最大震度7ということでした。職員は透析室に駆けつけました。7割方終了していましたが、残りの患者さんもただちに透析を終了させ、駐車場に避難しました。第2・第3病棟の患者さんも駐車場へ避難し、第1病棟の患者さんは病院前ロータリーに避難しました。ただちに災害対策本部を立ち上げ、各所属長を集めて被害状況を確認、このとき停電と断水になり自家発電が作動しました。余震は何度もありましたが1度目を超えるものではない、外は雪が降ってきて寒くなり夜が近づいてきて薄暗くなってきました。使える病室には患者さんを戻そう、病室が使えないところは健診ホールを使おうと決めました。第2病棟は壁が落ちて危険な状態なので病室としては使えません。第1病棟の患者さんは重症者を除いて戻しました。空いている病室を全部使って収容し、入りきらない患者さんは健診センターホールにマットを敷いて寝せました。第3病棟4階は余震による揺れがひどく53名の患者さんを戻すことが出来ません。夜間透析は中止と決めていたので、1階の透析室を1晩だけ病室として使うことにしました。重症者、手術当日の患者さんもここに泊まりました。12日土曜日は透析があります。宮城



県の透析施設は53ありますが、災害無線で各施設に連絡し、大部分は停電と断水で透析が出来ない状況です。市内と近隣から患者さんが集まってくるに違いないと予想されました。全部引き受けることを発信し、TV・ラジオでも呼びかけました。12日土曜日から、2時間半ずつの透析を1日8クール行ないました。朝6時が昨日受け付け分の最終で、9時が本日分の1回目の透析です。1日500人の患者さんを受け入れ4日間で1500回以上の透析をしています。36施設から患者さんを受け入れました。入院患者さんは、健診センター2階を病室にしたので8病棟が6病棟になっていますが、今も300人の患者さんが入院しております。2病棟の修繕工事をしておりますが、完了するまでは個室希望には応じられない状況です。

当院は医療支援も行なっています。津波の被害が大きかった南三陸町に健診バスを2台常駐させ、全国の系列病院と協力し4月30日まで医師、看護師、検査技師、薬剤師、レントゲン技師を派遣しました。山元町にも行きました。避難所の方58人にブロック注射や薬の処方を行っています。

当院も被害はあったけれど、さらに大きな被害にあった人に対して、出来ることを少しでもやっています。



震災その時

仙台社会保険病院 透析室 看護科長 水上 智加子

当病院は420床の総合病院だが、腎疾患の専門病院としての役割も担っており、慢性腎不全に至らないよう初期治療を行う一方で、血液透析、腎移植までの一貫した医療を行っている。腎センター透析室はベッド数63床を有し、昼と夜間の2クール体制で外来維持透析患者98名と各診療科に混在している入院透析患者100～120名の透析を実施している。

3月11日午後2時46分。その時、透析室では昼の部の患者さんの終了作業に入っていた。すでに透析が終了し、外来通院の患者さんは帰り始め、病棟からは迎いのベッド搬送が行われていた。地震直後は、患者さんのベッドサイドに行き「大丈夫、今、鎮まるから」と声を掛けつつ、心臓の鼓動が鳴り止まなかった。

一旦揺れが鎮まったと同時に、残りの患者さんの返血作業を行った。患者さんもパニックになることなく、スタッフは冷静に「大丈夫、今、車椅子もってきますよ」などと声を掛けていた。すでに透析室には、応援の医師や看護師、事務職が駆けつけていた。その後、患者さんを1階透析室西側の避難場所に搬送した。エレベーターが停止。4階の病室から患者さんを背負う医師や毛布やシーツに包まれた患者さんを搬送する看護師たちの姿があった。

雪が降り始め、夜は寒さを増しそうだったので、使える病室の患者さんは戻し、壁が崩壊して使えない病棟の患者さんは健診センターホールにマットを敷いて対応した。

透析室では、停電後に自家発電装置が作動、断水したがメイン配管の調整や給水車を手配、透析機器や透析液配管の状況が確認ができ、早期に透析可能と判断された。県内に53ある透析施設の多くは停電と断水、施設の損壊などで透析ができない状況であった。腎センター長は施設毎の依頼透析とスタッフ応援をお願いし、翌日から他の患者さんも引き受けると発信した。

11日夜間透析は中止。その夜空いた透析室を、余震が強くて戻せない4階病棟の入院患者、手術当日の患者、人工呼吸器装着の患者、重症者など、総勢74名の病室として使用し、病棟看



護師は交代で患者さんのケアに当たった。

透析スタッフは、翌朝からの受け入れ体制を整えるため、透析スケジュールの組み立てと透析準備を行った。その後3日間、2時間半の透析を1日6～8クール行った。24時間体制で36施設から延べ1108人の患者さんを受け入れ、1週間で1973件の透析を実施することができた。

何時間も歩いてやっと当院にたどり着いた患者さん、津波で濡れた透析手帳、泥だらけで患者さんを連れてきた職員、車椅子の妻を連れてやっとたどりついた夫、自施設の状況が分からず、また、情報が錯綜し、不安や苛立ちの中で待つ患者さんで受付の前は長蛇の列になっていった。

他施設からの患者さんには一緒に来た応援スタッフが対応してくれて、穿刺業務やメンタル面など各患者へ細かいケアを担当してくれた。私達は機械監視を含む透析の順調な遂行を徹底することができた。

震災前日、当院では近隣の透析施設スタッフたちと合同災害訓練の打ち合わせをしていた。震災が現実になり、透析施設同士の連携と日々の災害訓練や連絡体制の明確化などが本当に大切であると実感した。同時に、仲間の姿と患者さんからの言葉にどれだけ励まされ、大きな力になったことか。

不眠不休というが、その間は全く疲れを感じなかった。そして、栄養課は温かい食事を届け続けてくれた。その思いは現場で働く私達の原動力にもなった。

院内職員、関連施設スタッフそして、当院透析室スタッフに感謝し、ともにこの困難を乗り越えたことを誇りに思う。



地震後の対応

エコ療育園 看護部長 石田 真知子

地震直後からの3日間は何をしていたか順を追った記憶はなく、さまざまなことが断片的に記憶に残っています。

当園は120床の重症児施設です。揺れが収まって直ぐに入所者の無事を確認した後は、入所者をどこに寝かせるか、食料は、水は、オムツは、暖房は、ライトは、職員の飲食は…と次から次へと湧いてくる問題に関係部署と協議しながら対処しました。当日「災害伝言ダイヤル」とラジオ放送で「入所者全員無事」をご家族にお知らせしました。翌日からは朝夕と必要時各部署の代表者を招集して、刻々と変化する状況や対応に関する情報の共有に努めました。

自家発電は人工呼吸器等の医療機器に限定したので、皆暗く寒い夜を過ごしました。しかし、自分の家族と連絡もとれないまま働いている職員も多かったので、職員の携帯の充電は行いました。

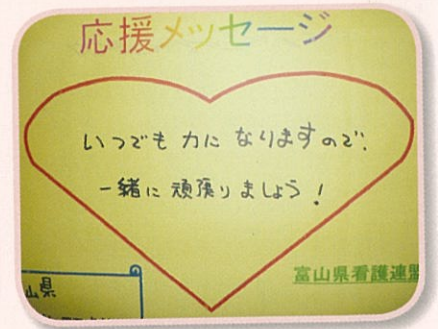
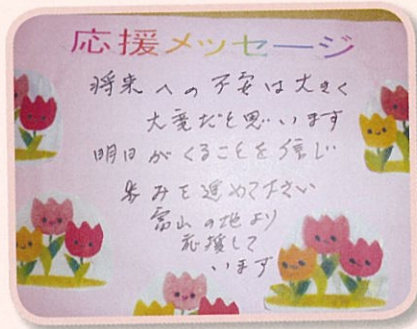
入所者の食料備蓄は3日分しかなく、栄養科と1日2食も検討しましたが、入所者は元々一回に十分に摂取できる状態ではないため、1日3食確保に奔走しました。職員の食料備蓄はなく、職員が持ち寄ったもので食いつなぎました。限りある受水槽の水と備蓄の水は大切に使いました。

オムツの在庫も約3日分でした。業者の倉庫が津波で壊滅、郡山の倉庫まで行けば提供できるとのことだったため、郡山までオムツ

調達に行きました。職員は排尿時水を流さず、紙をごみ箱に入れ、水は1日に1回トイレに風呂の水を流しました。排便はポータブル便器を使用し、穴を掘って埋めました。晴れた日には外で火を焚いて、なべで風呂の水を沸かして、清拭を行いました。循環風呂は感染対策上問題になっていましたが、今回風呂の水は清拭、掃除、トイレ用と大活躍し、今は災害対策上の重要性が見直されています。利用者の着替えを最低限にしても、洗濯物はたまっていくため、山形の業者まで洗濯物を運びました。車・暖房・自家発電用の燃料不足も深刻でした。3日目から職員送迎用のバスも運行しましたが、多くの職員が施設で寝泊まりしました。

施設ではより大きな被害を受けた地域の障害者を受け入れる方針を決めていました。2日目には「家が流された。この子は避難所では暮らせない。連絡もつかないので直接来ました。」という方を受け入れ、以後同様の方たちを受け入れました。

3日目に電気が復旧し、救援物資が届きはじめ、10日目に水道が復旧しました。その時になって給水・排水とも水道管が断裂していることが判明しました。何か所も破壊され、6月に入った現在も新たな断裂が見つかり、毎日復旧作業をしています。今も漏水→地盤の緩み→崖崩れという不安の中で、調理、風呂、洗濯、トイレと水を制限された生活をしています。





看護職は、被災地の住民の命にどう向き合ったか

宮城社会保険病院 看護局長 早坂 早苗

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災から 3 ヶ月が過ぎました。震災は地震と過去に経験のない大津波により甚大な被害をもたらした多くの方が犠牲になりました。亡くなられた方々のご冥福と被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

発災時、「ついに宮城県沖…が来た」と思いながら想定以上の激しい揺れに動揺いたしました。揺れている最中にスプリンクラーから豪雨並みの漏水を目のあたりにし、まず患者さんの確認をと思い階段を駆け上がりましたが、頭の中は真っ白でした。各看護科長から患者さん・職員の全員無事の報告を受け、外来での患者さんの安全確認中に津波警報が発令され地域住民（約 350 名）の方々が自院に避難してまいりました。

外来ではすでにトリアージの準備等の患者受け入れ体制を整えテント設営を行っていました。

雪の中、外傷や津波による低体温症、暖をとるためビニールハウスでの練炭使用による一酸化炭素中毒の患者さん、停電より酸素が供給できない在宅酸素の方も数名おりました。明けて翌日は被災患者さんはじめ被災病院からの入院患者受け入れなどに対応いたしました。そのような中、近所の方々から衣類や靴等の支援物資や差し入れを頂き皆様の温かい思いに触れることもできました。

緊急非常事態、看護職員は自らも被災者でありながら昼夜を問わず懸命に全力投球した数日でした。

(看護局長)

—地域巡回医療から—

① 雪の舞う震災 4 日目、情報が途絶えている中、住民の方々はどのような現状にあり医療ニーズはあるのか確認する為に近隣の避難所となっている学校へ向いました。

寒々とした校舎や体育館に大勢の方が身を寄せ合っていました。白衣を見つけた途端に数人の方が駆け寄り「薬をもらいに

行きたいが行けない」「血圧の薬を自己判断で一日おきに飲んでいる」「寝たきりの父の火傷が治療の途中だった。どうしたらいいか」「傷があるがこのままでいいのか」など不安な表情で口々に訴えられました。避難所では学校の教師だけで避難者のお世話をしている状況にあり慢性疾患を持つ避難者への対応に苦慮されていました。近隣の開業医が診療していることを情報提供し受診できる方は行って頂くよう勧めました。また、受診不可能な方に対しては改めて医師・薬剤師・看護師・事務員のチームで訪問し薬の処方と外傷の処置を行いました。当面の不安は回避された様子で「安心した」という声を頂きました。

また、不安のため不眠を訴える方にはどうしたらいいのか、教師からの情報と共に、自らも被災している教師の切迫した訴えにも耳を傾けました。

助かった命を無駄にしないよう、慢性疾患の憎悪を回避すべく地域住民の安心と安全の為に、このような時こそ頼れる医療機関でなければならないと 9 日間医療チームは奔走しました。

(地域連携室看護科長)

② まだ寒く広い体育館の避難生活の中でオストメイトは漏れに対する不安や予備の装具不足に対する不安と闘っていました。そのような中の震災 7 日目・14 日目にオストメイトの避難所巡回を行いました。オストメイトの状況は着の身着のまま何とか津波から逃れて避難所に身を寄せている状態でした。あるオストメイトは箱の切れ端を泥の中から何とか探し当て、藁をもつかむ思いで巡回している私に駆け寄ってきました。同じ装具をお渡しすると、装具を抱きしめ「これがあれば助かります。やっと安心できました。」と涙を流されました。オストメイトにとって装具は命の次に大切なもの。排泄ケアに関わる者として改めて実感しました。

(看護係長、皮膚・排泄ケア認定看護師)



東日本大震災・当院のあの日を語る。

仙台オープン病院 看護部長 遠藤 貞子

3月11日当日はとても静かに看護部長室で、次年度の計画の追い込みをPCで打ち込んでいました。突然、ぐらぐらと動き出し窓がダンダンとまるで奏でるように響きわたり、院内の地震通報が響き連呼し始まった。一瞬、呼吸器装着中の患者さんがいる所が危ないと思い、真っ先に足の定まらない廊下を走った。

患者の家族が廊下に出て、うずくまり「怖い!」と叫びそのご家族と一緒に受付カウンターにつかまり、心では「止まって!止まらなかったら大変な事になる!」と自分を落ち着かせながら地震が落ち着くのを待ったが、「だめだ!記録を取らないと!カメラを持って写真を取りなさい!と叫んだ。」さらに揺れが重なるように再び強く揺れ出した。これは大変な事態で病院が危ない!と思った瞬間、力強くスプリングクラーの水が廊下を駆け巡りはじめた。同時に到るところから医師、臨床検査室の男性軍、看護師が集まり呼吸器装着中の患者を同病棟内で移動して落ち着くかと思ったとたんに、天井の照明のカバーが壊れ停電、揺れが小刻みに続いた。免震構造の新館である「B-ICUへ移して!」と指示し、一般病棟の患者も大会議室へ退避を開始した。ほぼ満床状態の304名で、耐震構造の病棟にいた110名の中、坦送患者38名程はエアーストレチャーに乗せ、護送患者は搬送状態で、動ける患者は介助歩行で揺れが止まらない内に30分以内で退避を完了した。

そこから、新館に患者を割り振りするベットコントロール、スタッフを配置する師長、酸素のパイピングを準備するME、退避した患者を診察する医師、IUC対応の患者の環境を整え輸血する看護師、患者の持ち物等とベットを整える看護補助者、外来患者を誘導

する看護師と警備そして、救急外来は急患の受け入れ準備、トリアージ準備の外来と医事課、待機場所の準備、被害状況の確認の職員、災害対策本部を立ち上げて、正確な情報の共有とライフラインを確認する設備担当者、院内のスタッフの配置を指示する事務員と、それぞれがまさしく真剣に役割を発揮する姿があった。

16時30分が回り救急外来、外来に救急車のサイレンが鳴り始まった。大会議室にいた90名の患者の移動先は、一般病棟の4床室を6床室へ、呼吸器装着中の患者はICU定数6名の所を12名にし、手術室、健診室のホール ドックのベットを利用したが動ける患者と酸素の使う患者は大会議室に20名程度を収容した。エレベーターが止まり6階まで人力で配膳を行った。ところが、近隣病院の被害が大きいと情報が入り、再び落ち着いた患者を移動しベットを準備した。宮城野病院、厚生年金病院、スペルマン病院、石巻市立病院、石巻赤十字病院から搬送されてくる患者のベットを確保、さらに情報が相次で入り、在宅酸素、呼吸器使用の患者も停電の為に収容が可能かと医師が叫んだ。それには心電図室、地下のリハビリの準備室と病室になる所を探し、ベットマットを搬送後受け入れた。院外からの呼吸器装着中の患者は看護師と同乗搬入、手術室を2部屋確保し看護師も確保した。刻々と時間だけが流れ、看護部内に召集を掛けたのが19時を回った。各部署師長を集合し情報の提供、職員の安否、被害状況患者情報と明確に聞き取り、刻々変化する状況に対して適切な指示を出す事の難しさを痛感しながら、今この指示を正しく安全に行う必要がある事を簡潔に指示する。伝達している背後には自衛隊・救急車に数十人が乗って搬送、泥だらけの患者、ずぶぬれの患者、外

傷の患者、手術後の患者が搬送してきた。その中で院内では内視鏡的手術・治療、開心術も続行し19時過ぎICU入室を終了した。

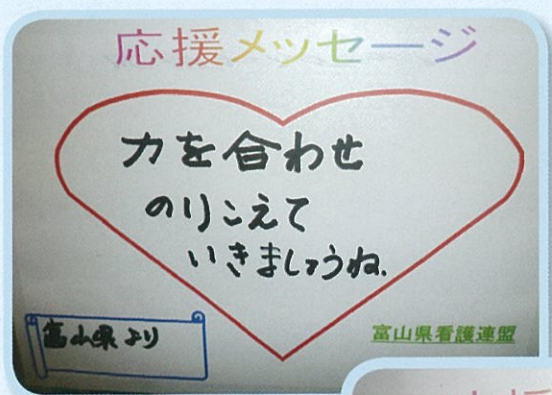
院外で何が起きて、被害状況を確認できないまま、目の前の患者さんに向き合い、指示を出し続けた。ふと、テレビの画面から気仙沼、石巻、の情報が入り「これは…」と絶句した。まるで、爆弾が落ちて空野か焼け野原か…。の状態の画像が連続で眼に入ってきた。「これが仙台？」と心で呟いたのを覚えている。11日は明け方まで外来から病棟を駆け巡り、患者の横で何分仮眠したのだろうか？

切れ目なく患者は続いた。翌日から徐々に職員の被害状況の確認を、現職員、産休者、育休者、採用予定の新人と看護スタッフ全員さらには関係する業者に連絡し安否確認と協力を要請した。同時に、避難して来た職員と家族の待機室の確保、食物・寝具の手配、患者の付き添いの食物、人員の確保の為にチャイルドルームの場所とその人員確保、避難所の巡回等と連日の対策会議では、患者の状況・

空床を報告し、今必要な課題と情報その対策を提案し院内の体制に重要な役割を看護部が担い同時に全職員が情報を共有して行動を起こす事が重要であった。

それには、普段の行動と横断的な教育が大切である事が示され、職員教育でトリアージと災害体制についての研修を実施していた事で、救急看護師を中心とした指示で職員が初動体制の行動と準備を取る事が出来た。さらには「地域住民の皆さんに、今こそ病院にある力を結束して提供することが今求められている。我々の使命と専門職である事を認識してほしい」と看護職に力説し職員の意志統一を図る事が、被災職員・家族いる現状で自分も振るい直し、方向を示す事でエネルギーの結束力に繋がったと今思う。

当院の対応は急性期の3月11日～15日間の収容人数は受診者数871名、内外傷319名、死亡確認4名、入院89名、全職員無事！避難患者を収容した大会議室で4月1日、新採用者39名辞令交付式を感無量で迎えた。





停電の中の一筋のあかり

みやぎ県南中核病院 看護部長 眞壁 京子

「3.11 14:46 M9.0」
決して忘れられない未体験の大揺れ、その場にく
ずくまるのが精いっぱい、看護部事務室の
ドアを必死で押さえていた記憶が今も鮮明に
残っています。

当院は宮城県南部内陸田園地域の災害拠点
病院です。日頃から大規模災害を想定し訓練
を重ねてきました。電気・燃料・食糧は3日
間をめやすに備蓄されております。

揺れが収まり各部署の被害状況を把握した
ところ、幸いにも院内のすべての人は命に別
状がなくほっといたしました。停電から自家
発電にきりかわり手術室では手術が無事終了
し、透析中の方は緊急返血によって無事終了
し、ICUでは問題なく人工呼吸器が作動を
つづけ、電子カルテシステムについてはまも
なく復旧しました。ただエレベーターが止ま
り復旧には二日間を要しました。

病院内施設の破損状況、周辺の陥没が明ら
かとなり救急病院として機能できるかさらに
詳しい点検が実施され、重傷者の受入れが決
定しました。

時間経過とともに入院中の患者さんを心配
してご家族が多数来院され、周辺では停電と
断水で住民の皆さんの不安は強かったろうと
思います。電話（携帯電話も）が不通となり
家族とすぐには連絡が取れない方がほとんど
でした。ラジオからの情報・テレビの情報が
刻々と伝わり大津波が岩手・宮城・福島の前
を襲ったようだという想定外の大地震の被害
状況が刻々とわかってきました。仙南消防
本部より海岸沿いの患者さんを搬送するとい
う連絡があり、当院では駐車場の一角を緊急
用ヘリポートとして可動準備しました。

雪が舞いあつという間に周辺が暗くなり、
患者搬送は12日6:00から始まること
が通達されました。低体温症の方が多数搬送
されることを予測し、外来のトリアージポスト
へ院内各部署の電気毛布とベッドセンター
よりリネンとベッドマットを集め、万全の収容

態勢を整えました。早朝から県外各県の防災
ヘリで搬送されたのは、津波の被害を受けた
施設の入所者でした。エアマットの上に浮い
ていたということでお名前が言えず、性別と
身体特徴及びおおよその年齢を記載し早速救
急処置が提供されました。病衣へ着替え体温
を温め経過を見ました。この方々以外に停電
が回復せず、在宅で人工呼吸器使用の患者さ
んがご家族とともに順次当院へ避難されまし
た。また在宅酸素使用の患者さんがご家族(ご
夫婦)とともに避難され、収容人数は日を追
うごとに徐々に増加していきました。リハビ
リテーション室へテーブルタップを運び酸素
濃縮機を準備常時20名ほどの方が避難しま
した。その後廊下にも避難場所を確保し、5
階・4階の食堂にも在宅酸素の方を収容しま
した。総数で50名ほどの方をお世話させて
いただきました。お食事もおにぎりや飲み物
を召し上がってもらいました。

お名前が確認できない高齢の方々には各階
のデイコーナーへ数名が寄り添うようにマッ
トを敷き、食事もテーブルを囲んで食べるよ
うにセットしシーツをカーテン代わりにして
環境を整えてできるだけ家庭的な空間を作
ってお世話した場面に看護者の心やさしい配慮
を感じほのほのさせられたことが思い出され
ます。震災から数日たってからは福島原発事
故で避難された方へかかわることもありまし
た。また避難所から肺炎や脳梗塞を発症し褥
瘡が多発された高齢の方への看護も提供いた
しました。震災から3カ月家が被災して入院
されていた方は退院調整看護師やMSWが介
入し退院しています。

震災から復興への継続した支援が続いてい
ます。災害拠点病院として今は平常診療へ
戻っていますが今も余震が続く中、停電の中
の一筋の明りの如く、今後も精神的な面での
かかわりや復興途中で疾病が発症した方へ当
院でできる看護の提供を継続していきたいと
思います。